

最新調査成果が語る新潟市の歴史

新潟市遺跡発掘調査速報会2025



沈んだ砂丘と現代の道路と弥彦山・角田山、そして佐渡(五番田遺跡)

2026年
2月21日(土)

会場 | 新潟市万代市民会館
多目的ホール



出山遺跡の発掘調査(1969年)

目次

プログラム・発掘調査遺跡位置図	表紙裏
講演「新潟砂丘の形成に関する最近の知見ー遺跡の立地と地形の変化ー」	1p
五番田遺跡	4p
調査・現地説明会風景	裏表紙

主催 新潟市文化財センター

新潟市遺跡発掘調査速報会2025 ～最新調査成果が語る新潟市の歴史～

日時 令和8年2月21日(土) 会場 新潟市万代市民会館多目的ホール

プログラム

- | | | |
|-------------|---------------|---|
| 13:00 | 開 会 | |
| 13:00～13:10 | あいさつ | 文化財センター所長 村山 明 <small>むらやま あきら</small> |
| 13:10～14:40 | 講 演 | 「新潟砂丘の形成に関する最近の知見－遺跡の立地と地形の変化－」
鴨井幸彦氏 (博士(理学)、株式会社村尾技建) <small>かもいゆきひこ</small> |
| 14:50～15:20 | 報 告 | 「五番田遺跡 2000年ぶりに姿を現した砂丘と遺跡Ⅱ」
牧野耕作 (文化財センター) <small>まきのこうさく</small> |
| 15:20～15:35 | 遺跡紹介 | 「個性際立つ砂丘の遺跡」
今井さやか (文化財センター) <small>いまい</small> |
| 15:35～15:50 | 閉会后、ロビーにて質問受付 | |



発掘調査遺跡位置図

新潟砂丘の形成に関する最近の知見 —遺跡の立地と地形の変化—

博士（理学）、株式会社村尾技建 鴨井 幸彦

1. はじめに

越後平野の海岸線を縁どり、延長70 km以上にわたって伸びる日本最大級の規模をもつ新潟砂丘（図1）は、越後平野の形成に深くかかわってきました。そして、そこに暮らす人々にも大きな影響を与えてきました。300万年以上も前から沈み続けている越後平野中央部では、古代人の生活の拠点はおのずと平野周辺の丘陵地のまわりや砂丘に限られました。砂丘地では、これまでにたくさんの遺跡が発掘され、最近では、平野の地下に埋もれた砂丘からも次々と遺跡が発見されています。これらの砂丘列は、いったいつ頃形成されたのでしょうか。そして、列状に何列もあるのはどうしてなのでしょう。

遺跡の発掘調査では、古代人の生活環境（まわりの地形や植生）を考えることが非常に重要です。ところが、当時と現在の地形が同じとは限りません。それぞれの時代に現代人とはまったく別の風景を見ていた可能性が高いのです。講演では、新潟砂丘列の形成年代に関する最新の知見、埋没砂丘から見える信濃川の河口の変化、地形や遺跡の分布から推定される阿賀野川の流路の変化などについて紹介し、遺跡の立地との関係を考えます。

2. 新潟砂丘列の形成年代

新潟砂丘は全部で11列に区分され、内陸から順次海側に発達してきました。古くから砂丘列上の地名をとって亀田砂丘、牡丹山砂丘、物見山砂丘などと呼ばれてきましたが、現在は大きくⅠ～Ⅲに分けられ、さらにそれらが細分され、新砂丘Ⅰ-1、新砂丘Ⅲ-1などと名付けられています（新潟古砂丘グループ，1974，2013；図1，図2）。もっとも古い砂丘は、約7,000年前に形成されました（図2）。これ以降、海側に新しく砂州が形成され、その上に砂丘ができるという形で順々に海側に発達してきました。

各砂丘列の形成年代は、図2のように推定されます。これらのうち一番新しい新砂丘Ⅲがもっとも規模が大きく、この形成によって信濃川、阿賀野川の河口がふさがれ、新たな出口を求めて流路が移動し越後平野の地形が大きく変わりました。

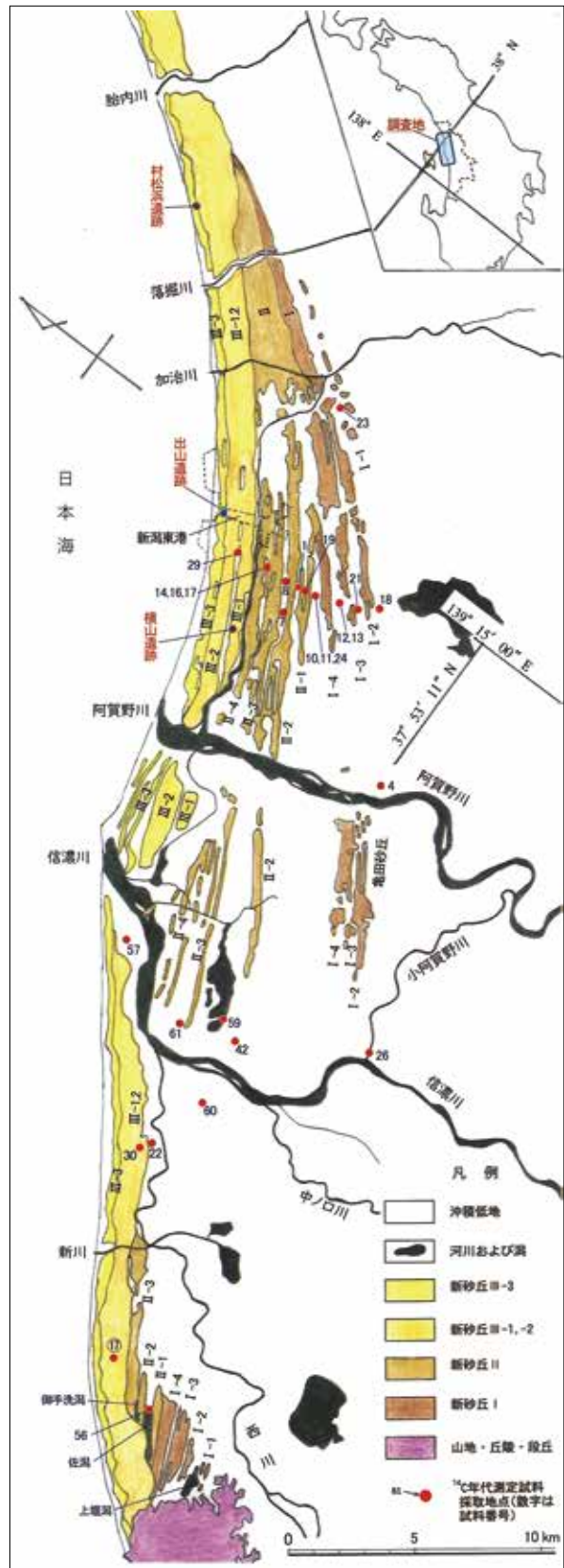


図1 新潟砂丘の分布図(鴨井ほか, 2025)

3. 亀田砂丘の対比の問題

亀田砂丘は、阿賀野川右岸の砂丘から離れており、信濃川の西側には砂丘が見られないため、孤立した形となっていて他の砂丘列との対比を難しくしています。これまで2列なのか3列なのか、新砂丘Ⅰのどの砂丘列に対比されるのかははっきりしていませんでした。しかし、最近、ボーリングデータの解析によって亀田砂丘の南方に新砂丘Ⅰ-1に対比される埋没砂丘が存在することがわかり、従来の亀田砂丘が3列から構成され、新砂丘Ⅰ-2～Ⅰ-4に対比されることがわかりました(図1)。この結果は、¹⁴C年代値や砂丘列上に分布する遺跡(笹山前遺跡)の年代とも一致しています。新潟市によって調査された岡崎遺跡、道正遺跡および五番田遺跡は、いずれも埋没した新砂丘Ⅰ-1上に位置していることがわかりました。

4. 沈降する越後平野と埋没砂丘

越後平野中央部は沈降帯に位置しています。しかし、琵琶湖のような湖にならないのは、洪水で大量の土砂が運ばれ、沈んだ分が埋められてしまうからです。亀田砂丘から西側では、海岸部をのぞき角田山麓まで砂丘は見られませんが、これはこの沈降運動のために、信濃川から角田山にかけてあったはずの砂丘は地下に埋まってしまっているからです。埋没砂丘の位置を明らかにすることは、過去の海岸線の位置を復元することにつながり、古代人の生活環境を考える上で非常に重要です。

ビルを建てたり、道路や橋を架けたりする際、地下の地盤状況を知るためにボーリング調査が行われます。平野の地質を研究する場合、この調査結果(ボーリング柱状図)が山間地での露頭(地層が観察できる崖)の役割を果たします。近年は過去に実施された膨大な量の地質情報のデータベース化が進められています。こうした地質データを使った研究により、埋没した砂丘の姿がしだいに明らかとなり、六地山遺跡、緒立遺跡などが新砂丘Ⅱ-2上に位置することがわかりました。

5. 信濃川と阿賀野川の河口の変化

阿賀野川：新砂丘Ⅰが形成されたころの河口の位置についてはよくわかりません。小阿賀野川に沿うように流れ、信濃川に合流していたという説もあります。新砂丘Ⅱ-1の時代には、砂丘を掘り割って現在の河道よりも東側で日本海へ注いでいた可能性があります。しかし、新砂丘Ⅱ-2からⅡ-4までは、砂丘列が阿賀野川の所で日本海側に向かって湾曲していることから、現在の河道付近で日本海へ抜けていたと考えられます。その後、新砂丘Ⅲが大きく発達したことにより、西流して現在の信濃川の河口付近で信濃川と合流するようになったと考えられます。

信濃川：約2万年前にピークを迎えた最終氷期以降、信濃川は越後平野の西の縁に沿うように北に向かって新川河口方面に流れていたと考えられます(現在の西川の流れに近い、新潟県地盤図編集委員会編, 2002)。これを古信濃川と呼んでいます。新しい砂丘列が順次海側に発達するにつれて、信濃川の河口は次第に東側へ、升潟→田潟→緒立付近へと移動し、新砂丘Ⅲが新砂丘Ⅱをおおって大きく発達する直前には、新川河口よりも東側にあったと推定されます。そして、阿賀野川と同様に、新砂丘Ⅲの発達により河口がふさがれたことから出口を求めて東へ流れ、現在の信濃川河口付近で阿賀野川と合流して日本海へ注ぐようになったと考えられます。

それでは、なぜ現在の信濃川河口付近で日本海へ流出したのでしょうか。確証はありませんが、私はそこが越後平野中央部の沈降帯の中心だったからではないかと見ています。

砂丘列名 (新潟古砂丘グループ, 1974, 2013)	新潟砂丘列の 形成年代 (鴨井ほか, 2025)	備考	
新砂丘Ⅲ	Ⅲ-3 砂丘間凹地	約800～600年前 (831-628calBP)以降	
	Ⅲ-2 砂丘間凹地	約1,200～800年前? (1245-831calBP?)	
	Ⅲ-1 砂丘間凹地	約1,700～1,200年前 (1747-1245calBP)	
新砂丘Ⅱ	Ⅱ-4 砂丘間凹地	約2,200～2,000年前 (2158-2037calBP)	
	Ⅱ-3 砂丘間凹地	約3,400～3,100年前 (3405-3054calBP)	鳥屋野潟, 御手洗潟の形成
	Ⅱ-2 砂丘間凹地	約4,600～3,800年前 (4580-3833calBP)	佐潟の形成
	Ⅱ-1 砂丘間凹地	約4,600～4,200年前 (4647-4152calBP)	
新砂丘Ⅰ	Ⅰ-4 砂丘間凹地	約5,400～4,800年前 (5350-4832calBP)	沼沢火山起原の軽石を含む, 沼沢火山の噴出: 5350calBP(山元, 2003), 北山池の形成.
	Ⅰ-3 砂丘間凹地	約6,700～5,400年前 (6656-5350calBP)	沼沢火山起原の軽石を含まない
	Ⅰ-2 砂丘間凹地	約6,900～6,600年前 (6937-6600calBP)	上堰潟の形成
	Ⅰ-1	約7,600～6,700年前 (7617-6745calBP)	

図2 新潟砂丘列の形成年代
(鴨井ほか(2025)を簡略化)

6. いくつかの話題

邪馬台国時代（3世紀前半）の信濃川と阿賀野川の河口：

新砂丘Ⅱ-4の形成年代は209-88calBCと推定される（図2）ので、邪馬台国の時代にⅡ-4はすでに存在していました。しかし、Ⅱ-4に続くⅢ-1の形成年代は204-779calADと推定されるので、Ⅲ-1はまだ形成されていないか、形成のはじまりの頃であったと思われます。おそらく、この時代には、信濃川は新潟大学五十嵐キャンパスの東側付近、阿賀野川は現在の阿賀野川筋にそれぞれ河口があり、分かれていたと推定されます。

湊足柵造柵期（7世紀半ば）の阿賀野川：

古墳時代中期前葉（5世紀前半）とされる牡丹山諏訪神社古墳が存在することから見て、Ⅲ-1は少なくとも5世紀以前には形成されていたと考えられます。したがって、湊足柵造柵期の7世紀には、Ⅲ-1はすでに砂丘として安定化しており、その内陸側を阿賀野川が流れ、信濃川との合流によって広い河口が形成されていたと考えられます。この状態は、1731年に松ヶ崎掘割が決壊し、阿賀野川に新しい河口が開くまで続きました。

遺跡の分布が語る阿賀野川の旧流路……なぜ阿賀野川の右岸にだけに旧河道が顕著に残っているのか：

遺跡の分布から、阿賀野川の河道は、縄文時代晩期から古墳時代にかけて、現在よりも3~4 km 東側に位置する駒林川こまばやしに沿うように流れていたと推定されています（金子1987, 荒川2020）。その後、西側へ移動し、現在の位置で落ち着きました。阿賀野川の右岸側にのみ蛇行跡が顕著に発達している点について長い間疑問に思っていました。この「河道の西側移動説」によってうまく説明することができます。河道が西側へ移動した原因に、越後平野の「西に傾き下がる」傾動運動が関係している可能性があります。

7. おわりに

越後平野を構成する地盤に関する情報は以前に比べて飛躍的に増え、疑問に思われてきたことが次々に明らかになってきました。しかし、地下の地盤の状態を直接観察することはできないので、まだまだ分からないことだらけです。平野の地盤の研究はボーリングデータに依存している面が多く、その量と質の向上によりさらに研究が進むことが期待されます。一方、ボーリングデータからは「地盤の良しあし」を知ることができ、防災・減災対策にも非常に役立ちます（例えば、「新潟県内液状化しやすさマップ」など）。今後もボーリングデータの蓄積（データベース化）が継続され、利活用が盛んになることが望まれます。

【主な文献】

- 荒川隆史（2020）阿賀野市における縄文時代晩期の大規模な河道について。（公財）新潟県埋蔵文化財調査事業団研究報告, 11, 1-14.
- 鴨井幸彦（2018）越後平野の地盤と防災。（一社）北陸地域づくり協会, 43p.
- 鴨井幸彦（投稿中）越後平野の形成過程における信濃川と阿賀野川の河口の変化.
- 鴨井幸彦（投稿中）新潟砂丘列の区分と対比および埋没砂丘の復元.
- 鴨井幸彦・田中里志・安井 賢（2006）越後平野における砂丘列の形成年代と発達史. 第四紀研究, 45 (2), 67-80.
- 鴨井幸彦・田中里志・安井 賢（2015）暦年較正年代による新潟砂丘列の形成年代の見直し. 第四紀研究, 54, 139-143.
- 鴨井幸彦・田中里志・安井 賢・岡本郁栄（2025）新潟砂丘列の形成年代再考—とくに新砂丘Ⅲについて—. 地球科学, 79, 199-208.
- 鴨井幸彦・安井賢（2004）古地理図でたどる越後平野の生いたち. 土と基礎, vol.52, No.11, 8-10.
- 金子拓男（1987）古代における信濃川・阿賀野川の河口と流路について. 新潟江南高等学校研究集録, 新潟県立新潟江南高等学校, 14, 61-69.
- 国土交通省北陸地方整備局・（公社）地盤工学会北陸支部（2012）新潟県内液状化しやすさマップ. 29p.
- 新潟県地盤図編集委員会編（2002）新潟県地盤図及び説明書.（社）新潟県地質調査業協会, A0版4葉, 66p.
- 新潟古砂丘グループ（1974）新潟砂丘と人類遺跡—新潟砂丘の形成史Ⅰ—. 第四紀研究, 13 (2), 57-65.
- 新潟古砂丘グループ（2013）寺泊—野積海岸の堆積過程と新潟砂丘・新砂丘Ⅲの再検討—新潟砂丘の形成史Ⅳ—. 新潟県地学教育研究会誌, 44, 23-38.

五番田遺跡

— 2000年ぶりに姿を現した砂丘と遺跡Ⅱ —

所在地 新潟市江南区茅野山

調査原因 主要地方道新潟中央環状線新設工事

調査期間 令和7（2025）年4月22日～7月17日

調査面積 1,308㎡

五番田遺跡は、江南区茅野山・割野地内に位置し、亀田砂丘（新砂丘Ⅰ）南側の沖積地に立地します。付近の標高は海拔0.9～1.0m前後です。五番田遺跡は、2021年に試し掘りを行い新しく発見されました。そして1回目の発掘調査を2024年に行い、2回目の発掘調査を2025年に行いました。



調査後の様子（6月下旬・東から）

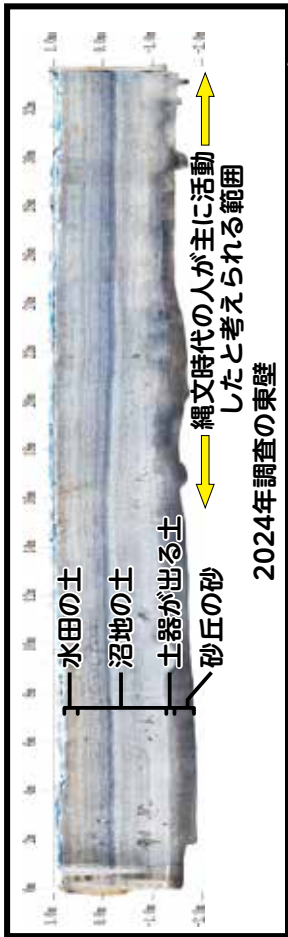
1回目の2024年の発掘調査では約1,400㎡を2.5～3.3m掘り下げ、縄文時代の建物1棟、弥生時代の建物1棟、まとめて出た石3か所、敷き詰められた縄文土器1か所などの遺構、縄文土器、弥生土器、石器、木製品などの遺物が見つかり

ました。その結果、新潟市で最も内陸にある、現在は地中に埋没した、7000年前に出来た砂丘の上に縄文時代前期（5500年前）・晩期（2900年前）、弥生時代中期（2000年前）の各時代で人々が活動しており、縄文時代晩期の土器が一番多いことから、その時代に最も多く人がいたであろうこともわかりました。また、建物が少ない・煮炊きの跡がみられないことなどから、長期間ここに居住したわけではなく、どこかもと住んでいた集落からここへ狩猟などのために出向いて短い期間活動していた可能性が高いことがわかりました。さらに南側が少し小高く平らで遺物も多く出土するのでここで主に活動していたであろうこともわかりました。そして地質学の専門家の方に現地を実見していただいたところ、亀田砂丘と地下でつながっている同一の砂丘である、とご教示いただきました。

今回の発掘調査は、2024年の発掘調査のすぐ東側の隣を調査しました。約1,300㎡を2.5～3.8m掘り下げ、まとめて出た石14か所、川跡1か所などの遺構、縄文土器、弥生土器、石器などの遺物が見つかりました。まとめて出た石が多く見つかったことが特徴です。これらの石は遺跡の地面にまとめて置いてあるものと、風倒木の中にまとめて置かれているものの2種類に分かれるようです。まとめて出た石は縄文時代晩期と考えていて、石を後で使ったり交換するためにまとめておいたものと言われています。また、遺跡の地形がさらにわかり、縄文時代の人々が主に活動したと考えられる範囲がほぼ判明したことも成果です。南側だけが周りより少し高く、去年の調査と同様にこの範囲から遺物が多く出ました。さらに弥生土器を詳しくみると、弥生時代前期（2400年前）のものも出土しており、新たに、この時代にも人がいたことがわかりました。2024年の発掘調査と同様、建物が少なく、煮炊きの跡もみられないので、もともと住んでいた集落からここへ出向いて短い期間活動していた可能性が高いです。

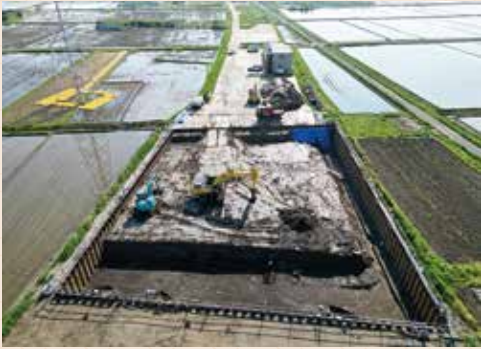
2年間でわかった五番田遺跡の内容は、①新潟市で最も内陸にある現在は地中に埋没した7000年前に出来た砂丘で、亀田砂丘と地下でつながっている同一の砂丘である、②縄文時代前期（5500年前）・晩期（2900年前）、弥生時代前期（2400年前）・中期（2000年前）に人々が活動しており、一番活動していたのは縄文時代晩期であること、③建物が少なく、煮炊きの跡もみられないので、もともと住んでいた集落からここへ出向いて狩猟や石の交換など短い期間活動していた可能性が高い、④南側の周りより少し高いところで主に活動していた、などのことです。

（牧野耕作）



上空から見た五番田遺跡

五番田遺跡



遺跡の深さまで掘り下げ (2025/5/14)



遺跡の深さまで掘り下げ (2025/5/14)



土を掘る！ (2025/5/29)



空中写真撮影前の清掃 (2025/6/18)



毎朝のラジオ体操 (2025/6/10)



小さな訪問者 (2025/6/11)



現地説明会 (2025/7/5)



現地説明会 (2025/7/5)

編集・発行 新潟市文化財センター
〒950-1122 新潟市西区木場2748-1

電話 025 (378) 0480

<https://www.city.niigata.lg.jp/kanko/bunka/rekishi/maibun/index.html>

発行 令和8 (2026) 年2月6日

